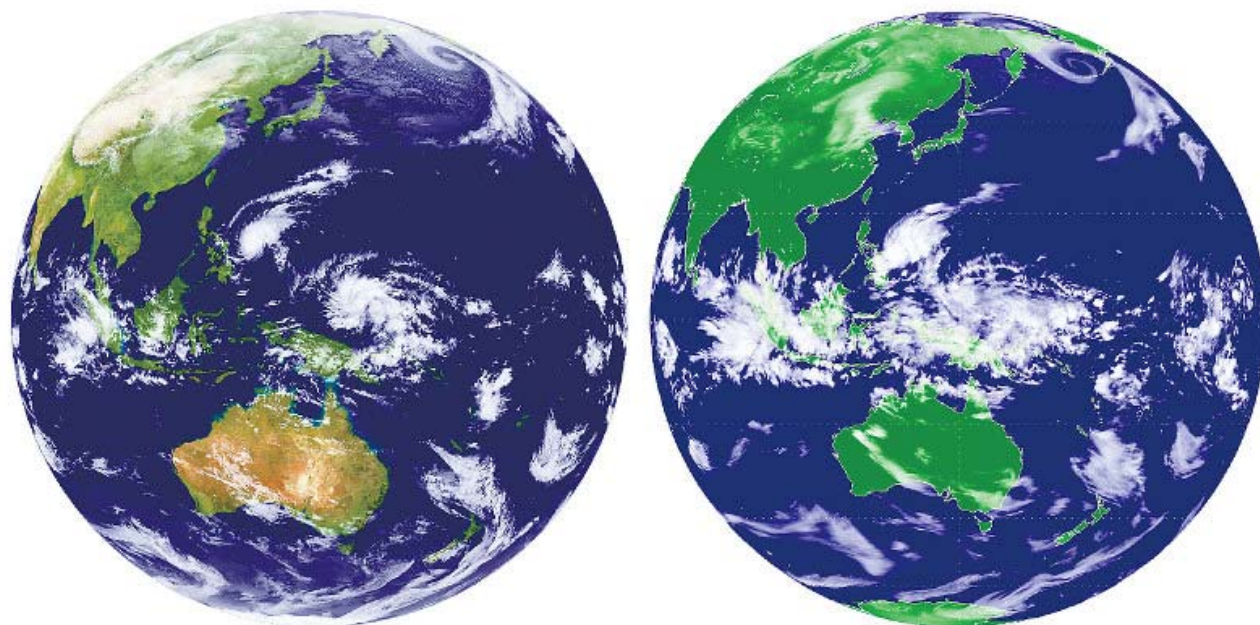


ひまわりEYE 雲の予測、現実並みに

毎日新聞 2016年5月13日 東京朝刊



(右)図は地球シミュレーターで作成。那須野智江・海洋研究開発機構主任研究員提供、
©JAMSTEC/AORI/RIKEN

ひまわり8号からは、宇宙空間に浮かぶ青い地球上で刻一刻と変化する白い雲の動きを見ることができる。東京大と海洋研究開発機構が共同開発した超高解像度全球大気モデル「NICAM」は、数値シミュレーションによってひまわり8号の画像と見間違えるような画像を描くことができるようになった。

<右>図は、昨年12月13日の地球の表面を、3・5キロ間隔で分割してNICAMでシミュレーションした雲の画像だ。<左>図は、同じ時刻のひまわり8号の赤外画像。NICAMの画像では、フィリピン付近の熱帯の雲の塊から台風27号が生まれる様子が、現実の画像と同様に分かる。

一方、ひまわり8号は2キロ間隔の画像が得られるが、同じ解像度でNICAMによる数値シミュレーションを実現するには、スーパーコンピューター「地球シミュレータ」や「京」が必要だ。

二つの図を比べると、N I C A Mの方がやや雲が多く、雲の生成過程のモデルを改善する必要性が示唆される。ひまわり8号のデータは数値シミュレーションの検証や改良、コンピューターを使った予測の基礎データ作りに役立つ。今後、N I C A Mやスーパーコンピューター、人工衛星のデータが、気象・気候予測のシミュレーション研究に大きな変革をもたらすだろう。（佐藤正樹・東京大大気海洋研究所教授）

共同企画・監修 情報通信研究機構（N I C T）／千葉大環境リモートセンシング研究センター

毎日新聞のニュースサイトに掲載の記事・写真・図表など無断転載を禁止します。著作権は毎日新聞社またはその情報提供者に属します。

Copyright THE MAINICHI NEWSPAPERS. All rights reserved.